

## 21 【だらし】

夏休み前に学校で遠足に行くのは、恒例（こうれい）でした。

標高（ひょうこう）一千の、小山でした。

標高二千の大山や、標高一千五百の中山でないならと、母親もぼくも油断したのかもしれない。

塩むすび一個しか、持っていかなかったのです。

もっともぼくの家は赤貧（せきひん）だったので、いつもそんなものだけれども、遠出するときにはいつもは用心に、蓬餅（よもぎもち）とか芋羊羹（いもようかん）を持参したものでした。

なぜなら、一種の餓鬼（がき）状態になると、【だらし】にやられるときいていたからです。

山道とかを歩いていて、突然に空腹感を覚え、全身がひどくだるくなり手足もしびれて、一步も前に進まなくなることがあるのだそうです。

これを、【だらし】に取り憑（つ）かれる、というのだけれども、いま考えれば栄養不足で低血糖（ていけっとう）になるのかもしれない。

それでも、こどもに低血糖は無関係な気がする。

さてぼくは、その【だらし】にやられました。

ぼくは先生に背負われて一足先に小山を降りることになったのだけれども、途中先生にお願いして、祠で降ろしてもらいました。

懐爺にきいてみるためです。

懐爺は私が来るのを待ち受けていたのだろうか。

何も聞かないのに、汚い掌にあんこ玉を乗っけて差し込みました。

「だらしないですね。まずはこれを呑み込みなさい」

「だらしない、じゃなく、だらしあるじゃろ」

「金ちゃんも、洒落がわかってきましたね」

懐爺はいつにもまして、うれしそうでした。あんこ玉を呑み込むと、五分も経たずに、ぼくは元気がでてきました。元気の証拠に憎まれ口をたたきました。

「【だらし】なんか、おぼけじゃない」

「いいや、あれもおぼけ。その証拠に【だらし】にやられたのは、金ちゃんだけでしょう」

「そらあ、わしがおやつを、もってかなかったせいじゃ。しょうこに、かいじいはあんこだま、くれたでねえか」

「【だらし】退治の、あんこ玉ですよ」

「あんこだまでたいじできるおぼけか、たいしたおぼけじゃないのう」

「それがたいしたおぼけで、あんこ玉がないと死んでしまう場合もあります。その証拠に金ちゃんは、あんこ玉で生き返りました」

「かいじいはなんで、あんこだまもってたんじゃ」

ぼくはどうにも、腑（ふ）に落ちなかったです。

「実はわたしも遠足。中山まで行って、ついきましたがた帰ってきたところで。【だらし】にやられるといけないから、あんこ玉用意してありました。証拠はほれ、中山の頂上の小石を持って帰りました」

たしかに、あんこ玉でないほうの掌には小石が。

しかしこの小石が、中山の頂上の小石なのか。

その証拠はない。